

軍 事 史 学

第 59 卷 第 2 号

卷 頭 言

自衛隊の新型コロナウイルス対応を振り返って 町田二仁

物事には、歴史的出来事だったと捉えられている事象が多くあります。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が生じた二〇二〇年一月当初、私はベストやスペイン風邪等を知っていても、現代のパンデミックなど想像もできず、当然、防衛省・自衛隊がこれほどに広範多岐に対処するなど考えもしませんでした。しかし感染は容赦なく拡大し国民の不安は一挙に極大化し、非常時に対応し得る自衛隊に大きな役割が期待されました。自衛隊が感染症対処で正面に出る時代なのか?と思いつつも、いざ活動を始めると蓄積していたノウハウや組織力、現場対応力が大いに発揮されることとなりました。

中国武漢市から帰国した日本人の方々は、埼玉県の国立保健医療科学院や税務大学校に滞在しました。支援物資の集積場所は併設の体育館とされましたが、約八〇〇人の日々を支える物資は想像以上に大量ですぐに溢れかえります。解消したのは自衛隊の補給管理のノウハウでした。毎日の入荷、集積、配布などを効率的に行うための出入庫要領、物品毎の配置、時間配分等の改善は、部隊展開時の兵站を捌く自衛隊ならではのものです。横浜港大黒ふ頭に着岸した「ダイヤモンド・プリンセス号」内の感染防護対策は生物・化学兵器から隊員を防護するための基本そのものであり、その後各地方自治体の職員の皆さん、三三都道府県約二、四〇〇人余りの方々に災害派遣での教育支援として普及されました。教育支援がこれほどまでに大規模かつ広範に実施された例は初めてです。そして新型コロナウイルスの大規模接種。自衛隊が国民の皆さんに直接ワクチン接種を行う型破りとも言われたこの事業は、累計約二四八万回の接種を衛生科部隊と自衛隊病院が核となって初の官民協力体制を敷いて行い、日本国内のワクチン接種の起爆剤と評されました。

防衛省・自衛隊は、未知である新型コロナウイルス感染症にどのように対応したらベストかを考え抜き、一体となって協力し全力であたりました。史学の意味は、現代を考えること、人間を考えること、そして未知のものへの理解を深めることとされます。本冊に収載されている過去に軍隊が果たした役割と合わせて将来に受け継いでいただき、次の未知に備えていただければ幸いです。

(前防衛省人事教育局長)

※筆者は、二〇二〇年一月から危機管理担当の大臣官房審議官ついで人事教育局長として、防衛省・自衛隊の新型コロナウイルス対応にあたった。